【郷土史への扉】

「大隅国」建国千三百周年

一　平城京遷都千三百周年

今年は藤原京から平城京に遷都（和銅三年・七一〇）して千三百年を迎えます。

平城京への遷都は、大宝元（七〇一）年に大宝律令が制定され、日本が律令国家として国の内外にその威信を示すために行われたものといわれています。その後、延暦三（七八四）年に長岡京に遷都されるまでの七十四年間、政治経済の中心地でありました。

二　薩摩国の建国

では、このころの南九州の様子はどのようだったのでしょうか。

南九州は古事記・日本書紀にも書かれているように、土着の民であったクマソ・ハヤトの人々は朝廷側の支配に対し最後まで抵抗をしていました。

このような地域であったため、当初は日向国（現在の宮崎県と鹿児島県）一国でしたが、その支配力を強めるため、大宝二（七〇二）年に日向国から唱更国（後の薩摩国）が分国しました。

薩摩国の設置については、奈良時代の歴史書である『続日本紀』の大宝二（七〇二）年八月の記事に「薩摩・多禰・化を隔てて命に逆らふ。是に兵を発して征討し、遂に戸を校べ吏を置く」と書かれており、戸口（戸籍）調査を実施し官吏を任命していることから、これを薩摩国の設置と見ることができます。唱更国司とは辺境の守備にあたる国司という意味で、対ハヤト政策に位置付けられた国司（朝廷から派遣された役人）のことであると思われます。

三　大隅国の建国

大隅国の建国も薩摩国と同様に、奈良朝廷が律令制度の確立と支配力をより強めるため行ったものと思われます。

大隅国の建国については、『続日本紀』の和銅六（七一三）年四月の記事に「日向国の肝坏・贈於・大隅・姶羅の四郡を割きて、始めて大隅国を置く」とあり、それまで日向国に属していた四つの郡で大隅国が造られたことが分ります。

また、『続日本紀』には大隅国設置を記載する前段に、丹波国の五郡を割いて丹後国（京都府北部）を置き、備前国の六郡を分けて美作国（岡山県北部）を置く、と書かれており、奈良朝廷が律令制度の確立と支配力強化を全国的に進めていたことがわかります。

四　建国への抵抗

大隅国の建国に対して地元の動きはどうだったのでしょうか。薩摩国が武力で設置されたように、大隅の地でもかなりの抵抗をしていたようです。その抵抗の様子は史料にははっきりとでてきていませんが、『続日本紀』の和銅六（七一三）年七月の記事で次のように書かれています。

『今、隼の賊を討つ、将軍あわせて士卒ら戦陣に功ある者千二百八十余人に並に労に随ひて勲を授くべし』

これは、建国に反対した土着の人々（ハヤト）の征伐が行われ、それに従軍した将兵に叙勲が行われていたことがわかります。叙勲を受けた数を見ても、かなり大規模な抵抗があったことを現しており、鎮圧された後も、朝廷側に対する反感は燻ぶり続けていたようです。

それは、養老四（七二〇）年に国守陽侯史麻呂の殺害から始まる「隼人の乱」からでも見ることができます。

このように、大隅国の建国にはさまざまな出来事がありました。また、建国後には大隅国府をはじめ大隅国分寺、韓国宇豆峯神社、台明寺、祓戸神社、大隅正八幡宮（鹿児島神宮）など多くの社寺仏閣などが建てられました。（各史跡については今後紹介していきます。）

平成二十五年には、大隅国が建国して千三百年を迎えます。平成二十五年までの四年間、「大隅国」について郷土史への扉や特別展、シンポジウムなどを通して、市民の皆さまに紹介してまいりたいと考えています。

文責＝鈴